



TITLE:

<文献レビュー>近代中国における「女」の再発見 --戴錦華・孟悦『歴史の地表に浮かび出る 現代女性文学研究』 --

AUTHOR(S):

馮, 可欣

CITATION:

馮, 可欣. <文献レビュー>近代中国における「女」の再発見 --戴錦華・孟悦『歴史の地表に浮かび出る 現代女性文学研究』 --. 教育・社会・文化 : 研究紀要 2022, 22: 13-25

ISSUE DATE:

2022-03-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/270046>

RIGHT:

近代中国における「女」の再発見

—戴錦華・孟悦『歴史の地表に浮かび出る 現代女性文学研究』—

馮可欣

戴錦華・孟悦

浮出历史地表：现代妇女文学研究

(北京：北京大学出版社，[1989] 2018)

Kexin FENG

1. はじめに

1980年代、中国では改革解放政策が推進されるにつれて、経済の自由化・市場化によって人々が裕福になったにもかかわらず、女性就労問題や、性の商品化、男女経済格差の拡大、DVなどの問題が浮かび上がった。こうした状況に対応するために、全国婦女連合会⁽¹⁾は活動を再開し、女性問題に関する研究会を開いた。政府側のイデオロギー統制への対応だけではなく、国際的なフェミニズムの動向を参照しながら、欧米のフェミニズム思想が中国に影響を及ぼし、日本からは女性学が紹介された。一方、民間組織や研究会は中国の女性問題に対して独自の取り組みを始めた。鄭州大学の教員であった李小江(1951-)は、中国独自の女性学を建設しようと提唱した。李(1983)は、女性は社会革命によって解放されるものではない、解放を達成するために自身が引き続き戦いをしなければならないと主張した。その後李は、85年に民間団体「河南省未来研究会婦女学会」を創設し、87年に「鄭州大学婦女学研究中心」を設立した。それと並行した形で、李は女性学の各分野を網羅した『婦女研究叢書』の出版を企画し、中国独自の女性学を学術分野として確立するために努力を重ねた。88年から刊行が始まった『叢書』は、女性学理論、文学、歴史学、法学、人口学など中国の女性学の多分野に響きわたる産声となった⁽²⁾。

本書はその『婦女研究叢書』の中の一冊である。女性学理論を用いながら1917年から1949年までの女性文学史⁽³⁾に取り組んだ研究として、本書は「中国女性文学史という未開拓の分野に、フェミニズムの大鉈を振り上げて斬り込んだこの本は、開拓者としての熱気にあふれている。

(中略)中国女性文学研究にとっては、誰かが置かなければならない礎石の一つがやっと置かれたという感がある」(秋山 1992, p.31)と高く評価された。1989年に初版が発行された後、2003年の再発行を経てから15年後、2018年に北京大学出版社によって再び校閲され改訂された新しいバージョンが出版された。フェミニズムが中国で普及していく中、本書は出版当時

の学術研究者向けの本から、一般読者の間にも人気を呼んだベストセラーになった⁴⁾。フェミニズムと女性学が中国で根を下してから30年後の現在に立ちながら過去を振り返って見ると、本書がなぜ国際的に高く評価され、今なお生命力を持っているのか、また本書の中で触れた女性主義⁵⁾批評の方法は今日の中国社会にどのような示唆を与えるのかなど、興味深い論点が浮上した。

2. 著者紹介

本書は戴錦華・孟悦による共著である。孟は本書の綱目と各年代の総論を担当し、戴は作品論を担当した。

戴錦華(1959-)は女性文学研究、映画史研究、マス・メディア研究、ジェンダー研究で著名な学者である。北京大学中文系卒業後、11年間北京電影学院映画文学の講師を務めた。1993年に、北京大学比較文学・比較文化研究所に赴任し、1995年中国初の比較文学研究室を創立した。現在は北京大学人文特任教授を務めており、北京大学映画・文化研究センターの主任も担当している。これまでの単著では、映画研究としての『霧中風景(霧中风景)』([2006] 2016)、文学・文化研究としての『不可視化された文学作品(隠形书写)』([1999] 2018)、共著には本書と『性別中国(性別中国)』(2006)が有名である。そのほかの編著も数多く出版しており、映画理論、映画史、女性文学、ジェンダー研究において示唆に富む。Barlow(2004=2011)によって、戴が提唱した「ポスト構造主義フェミニズム」は、グローバル化した中国における女性主義がマルクス・レーニン主義から脱出して世界的潮流と接続したことを示している。

もう1人の著者の孟悦⁶⁾は北京大学中文学部、中文研究科出身。1985年、修士課程修了後、アメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校で博士課程に進学し、2000年に歴史学の博士号を取得した。清華大学准教授を経て、現在はカナダのトロント大学の東アジア研究科で准教授に就任している。主要な研究分野は歴史学、文学と人類学であり、特に環境人類学、20世紀の中国文化史と文学、科学史と中国の現代都市研究を研究テーマとしている。単著には『歴史と叙述(历史与叙述)』(1991)、『人・歴史・家園 文化批評三調(人・历史・家园:文化批評三調)』(2006)、『物質文化読本(物质文化读本)』(2008)などがある。そのほか、英文の出版物も数多くある。

3. 本書の理論枠組みと視座

本書の理論的枠組みとして、ラカン派精神分析の系譜を引くリュス・イリガライなどに代表される女性主義批評の方法が使われる。この女性主義批評の根幹になるのは「象徴的秩序」である。生き物としての男/女は共に象徴秩序に参入するが、その秩序での位置づけは異なるため、

及ぼされる効果には大きな差が見られる。男性は象徴的秩序の中心にいながら、男性中心の言語/表象機構を利用して女性は「表現不能な存在」とされた。こうした自ら自己を表現する「女の言語機構」の不在は、著者によって「構造的な女性の不在」(p.31)と定義された。また、ラカンの精神分析理論を踏まえながら、ジュリア・クリステヴァの理論から影響を受けた著者たちはラカンの理論枠組みの射程を越えて、女性たちがいかにして男性によって支配された言語・表象実践に参入したり、「男の言語機構」を改装したり、さらに自己を表現する言葉を獲得していくかに注目した。無論、その過程は決して順風満帆ではなく、当時の女性たちと既存の秩序との間に生じた葛藤と成果、またはその限界も本書の射程に入る⁽⁷⁾。

4. 本書の概要

本書は序論、第一部(1917-1927)、第二部(1927-1937)、第三部(1937-1949)とエピローグの五つの部分から構成されている。第一部から第三部までは冒頭にその時代的・社会的コンテキストとその時期の中国女性文学を概観した総論が孟によって書かれている。その総論に、戴によって当時の主要な女性作家と作品を女性学の視点から分析する各論が続く⁽⁸⁾。

4.1. 序章

序論では、「歴史における女性の不在」というキーワードがまず打ち出され、1917年までの中国において、女性は男性によって抑圧され、統制された存在であったことを指摘した。「女性の不在」には二重の意味が見られる。一つは、女性の多様なありかたが男性中心の言語/表象システムによって隠蔽され、男性の欲望や幻想の投影とされた「女性役割」しか存在しなかったという意味である。もう一つは中国の封建制度のもとで、父系血縁を中心とした家族制度、「人倫」を名乗るイデオロギー的な倫理規定と、男性によって握られた「文の覇権」⁽⁹⁾によって、「女性の不在」そのものが自然化し、男性による女性の抑圧は隠蔽されたという意味である。その結果、女性は男性中心主義の言語によって恣意的に規定されたと同時に、女性に関する真実や女性の実態は言語上不在で表象不能なものとなった。こうした女性の歴史的な位置づけに対して、著者は「女性に関する真実の発掘は、権力構造の奥底に埋められ、今までの歴史的解釈の外に追いつけられなかった歴史の無意識の部分を発露した。(中略)そこに歴史的な神話を打破し、イデオロギーを転覆する潜在能力がある」(p.4)と本書の意義を打ち出した。「女性の不在」を踏まえ、1980年代の中国社会に立ちながら「女性はどこまでたどり着いたのか」(p.22)という疑問を投げかけた。中華人民共和国の成立によって、共産党政権は男女平等の婚姻法の実施を通じて女性の家庭での権利を保障しただけではなく、女性の労働参加を当然として社会進出を促進し、女性の社会的地位が大きく向上した。しかし、「社会主義は女性を解放する」という公式見解のもとで、中国における女性解放は男性によって主導され、女性の男性化によって達成された側面とともに、女性による闘争と努力の歴史も隠蔽されてしまった⁽¹⁰⁾。そのため、女性の作家が如何に男の文的覇権から脱出し、男性中心主義の言語/表象機構を改装して女性ならではの真実を描き

出したのかに注目するのは、中国の女性解放に関する公式見解を相対化する視点を獲得するための、避けて通れない作業である。

4.2. 第一部 (1917-1927)

まず、孟による総論は五四時代を「父殺しの時代」と定義する。「反逆の息子」である五四時代の青年たちは「民主」と「科学」の旗印の下で「父」という数千年にわたって支配してきた父系社会を覆した。そして、反逆する「子」の仲間として五四運動の舞台に上がったのは「反逆の娘」である女性作家たちである。しかし、国民国家と一心同体となった「息子」たちと違い、「反逆の娘」は時代の主人公というより、むしろ「反逆の息子」の「他者性の投影」(p.55)でしかない。さらに、その時代の若い女性たちの反抗はごく限られた範囲——娘、あるいは少女という発達段階——でしか展開されなかった。彼女たちの物語では、エンディングで家出する姿が描かれ、その後にある結婚生活や出産、社会進出、老後は不透明な存在、想像できない存在として放置された。そのため、「『娘』という発達段階が象徴するように、五四時代の女性作家の創作は青春、騒乱、幻想、脆さ、未熟さと浅はかさ、成人の持つ老練でしっかりしている眼差しを持っていないものに過ぎない」(p.55)と孟によって指摘された。自分を確立して自分らしさを表現し、社会に受け入れられるため、彼女たちは人生、感情、愛、家庭、個性など、まだ男性によって定義されておらず、かつては「中性」とされていた領域にまつわる同時代的な課題に取り組んだ。しかし、女性問題が同時代的な課題に回収されたら、女性作家の女性としての独自性は時代の言語実践のなかで埋没してしまう。

孟の総論に続き、戴は同時代のいくつかの女性作家のライフコースと作品を分析する。女性作家廬隱⁽¹¹⁾とその作品は中国の「ノラ」⁽¹²⁾たちに焦点をあてて、父権に反抗して「父」の家から逃げたものの、去就に迷いながら「心の断橋」(p.29)でさまよう「ノラ」たちの様子を描き出す。沅君⁽¹³⁾の作品にも「ノラは家出してからどうなったか」⁽¹⁴⁾という疑問が見られるが、それ以上に「父の娘」の感じた恐怖と興奮が混じり合う感情の複雑さも表現される。氷心⁽¹⁵⁾は「親子関係」と「童心」や「母性愛」を重点的に描き、「母」と「娘」との関わりによって女性の主体性を獲得するためのもう一つの可能性を提起する。凌叔華⁽¹⁶⁾の作品では「父の娘」と同じ時代に属したが、古い伝統中国社会に残った/残された女性のありさまに光を当てる。

4.3. 第二部 (1927-1937)

孟は1927年から1937年までの時代を「政父」と「大衆の神」の対立の時代であると定義する。五四時代の「父殺し」によって転覆された「父」は、1927年以降に、武力を基盤とした軍事統制集団「軍閥」として再び登場した。国民党は政権の座につくと一転して女性の参政権を拒否し、勇敢で強健で規律化された身体を持ち、武器を手にして国民国家に身をささげる英雄的な国民像が登場して新たな「父」の権威とされた⁽¹⁷⁾。この新たな「父」と対抗するために、中国の知識人たちはマルクス主義の中の「階級闘争」や「革命」をスローガンとして「大衆」という神話を創出した。この「大衆」は「熟睡しているが、いつか目覚めて天地を逆転させる巨人」(p.134)である。「大衆」は受難者であるが、同時にすべての苦難に対して審判を下す絶対的価値の化身である。

しかし、「大衆の神」は新たな「父」とは対立的な存在であると同時に、個人を第二義的な存在、従属的な存在と位置づけた。また、同時代的な課題は「父殺し」から「大衆革命」に移ったとともに、「息子」と「娘」の精神同盟は終りを迎えた。「娘」たちは再び社会的に、精神的に孤立状態に追い込まれた。しかし、この時期の反逆する娘たちにとって、「疎外感を獲得して異分子と自覚したのは、男性中心の社会と文化の中で、女性的なジェンダー・アイデンティティを確立するための前提条件である」(p.139)と著者たちは指摘した。この時期の「娘」たちは、たとえ周縁であろうとも、ようやく主体的な存在として時代の舞台に登場し、成熟に邁進した。「娘」たちは身体的な欲望に目覚めたと同時に、「男女平等の五四同盟」の化けの皮をはがして「父権」を内包した「男権」に疑問を投げかけた。

この部分で戴によって重点的に論じられたのは丁玲⁽¹⁸⁾と簫紅⁽¹⁹⁾という作家である。丁玲はモダン・ガールの生活に注目し、女性は解放の高揚感を味わいながら、「性の商品化」と「女性の疎外」に向かわせられたことを暴き出した。こうした都市生活で孤立状態におちいった丁玲は「恋愛と革命の葛藤」を経て、抗日戦争や大衆をテーマとした作品を作り出した。皮肉なことに、丁玲は「大衆」の一員になることによって「孤立」から脱出したが、それと同時に女としての独自性を放棄した。丁玲と違って、簫紅は生家から婚家へ、婚家から恋人との家父長制に対抗するための同盟関係へと転々していた。簫紅は女性の孤立に苦しんだが、従属的位置づけに戻るのを拒絶し、女性としてのもう一つの可能性を見出した。簫紅の作品では、伝統的生活を営んできた農村の女性が如何に戦争に巻き込まれていったかが描かれた。また、彼女の作品では、「女性の身体そのものを通して生命の意味を問う」(秋山 2004, p.134) 姿勢が読み取られる。

4.4. 第三部 (1937-1949)

日中戦争の勃発によって、この時期の中国は国民党支配地区、日本占領地区と、共産党解放地域に分断された。国民党支配地区と共産党占領地区には愛国、抗戦という支配的なイデオロギーのもとで、女性自身に注目する作品は周縁に追い込まれたと対照的に、日本占領区では女性文学は大きな発展を遂げた。当時、日本軍による検閲は「大衆」「民族」「国」「党」など、大文字の政治に関連する刊行物に重点を置いていた。国民党、共産党占領地区では女性の自我を表す作品は 30 年代以降一貫して周縁に置かれ、消えてゆきつつあった一方で、それらの作品は日本占領区では無害とみなされ、逆に大きく発展した。そこでは、個人や自我、愛、男女関係などのテーマが盛んに取り上げられるようになったのである。この時代の女性作家たちは「弱者」(p.239) の段階から成長して成熟した女性となった。彼女たちは男性によって押し付けられた役割や女らしさを拒絶しながら、女性の真実を描き出した。

この時期の代表的な作家は蘇青⁽²⁰⁾と張愛玲⁽²¹⁾である。蘇青の作品の中で登場したのは「新旧混合」の女性である。彼女たちは自由な恋愛を経て、生家から婚家への軟着陸に成功した。しかし、当時の女性にとって、結婚は通過儀礼というより、むしろ「レヴィ＝ストロースが論じた『交換』」(p.248) にすぎない。それゆえ、彼女たちは「夫の妻」ではなく、むしろ「姑の嫁」になり、「成熟した女性」ではなく、生殖器になった。張愛玲の作品の中で、女性は「屏風に刺繍された鳥」のように、「桎梏された翼しかもたない、想像上の飛翔しか体験できない」(p.267) 存在である。

張の作品は母親と娘の緊張に満ちた関係性に重点を置いたが、それは母親と、自分の分身としての娘が一人の男性(夫/父)を奪い合うための戦争ではない。張の作品の中で、男性は背景に退き、母は娘/もう一人の女の桎梏から逃げていく可能性を扼殺するためにサディスト的な行動を取る。また、こうした狂気に満ちた「女と女」の関係には、父権への絶望的な復讐が見られる。

4.5. エピローグ 「性別」と「精神性別」⁽²²⁾

孟によって、中国における「女性の解放」は二つの軸に沿って進んだと明らかにされた。一つは五四時代に誕生した新しい文化であり、もう一つは中華人民共和国の成立である。その二つの軸はそれぞれ、「女性のジェンダー意識と自意識の目覚め」および「奴隷から公民への道」を象徴した。しかし、中華人民共和国の成立によって、男女平等は国を発展させるための重要な政策として打ち出され、ジェンダー秩序の再編が推し進められた。特に婚姻と労働の面で、女性の地位は著しく高められた。新中国の成立は、女性の解放を自動的にもたらすはずであったという共産党の考えに対して、新中国における女性の精神的成長は停滞したというより、むしろ後退したと著者たちは指摘した。著者たちは、女性解放の物語には、女性が自ら語るものと、他人によって語られるものがあるとした。新中国の成立以降の女性は「眠れる美女やシンデレラなど男性によって価値と生命を与えられるプロトタイプと同じ」(p.278)である。ただ、この場合、助けにきたのは王子ではなく、共産党という新しい「父」である。「党の娘」というイメージは、新中国女性のジェンダー・アイデンティティを規定し、女性の精神的成長の道を閉ざした。このように、中国における女性解放は独自の道を歩みながら、女性を「不完全な解放状態」へと追放した。

5. 考察

本書は初め 1989 年に発表され、発展の初期段階にあった中国のジェンダー研究・女性学研究に多大な影響を与えた。歴史的に長らく隠蔽されてきた「女」を浮上させたことによって、男の書き手によって作られた男性中心の文学史に異を唱え、女性主義の視点から女性文学史を再発見しただけではなく、中国文学史の流れそのものを全体として捉え直した力作である、と秋山洋子(1992)は評価する。また、著者たちは女性作家の創作活動を「女性の真実」を発露したと定義した一方、その「真実」はまだ未完成であると指摘し、主体的存在である女性が持っている真実は未来に賭けられていると示した。それに対して、Barlow(2004=2011, p.3)は「過去未来形(Future Anterior)」を用いながら、「女性は未来に何になるのかを強調することによって、文献エビデンスの中の女性イメージは揺るがされた。それによって、私たちの女性を捉える方法は変えられ、女性の現状よりポテンシャルが注目されるようになる」と、本書を高く評価する。秋山とバーローの考察は文学史と思想史の立場から本書を中国における女性文学史研究の先駆けと、中国における女性主義思想史の発展の一つのマイルストーンとして捉え、

今でも多くの示唆を与える。それを踏まえ、本稿は同じく女性主義の立場を取りながらも社会学的にアプローチして本書を再評価することを試みたい。

5.1. 女性側の視点と「個」の存在

まず、本書は 20 世紀初頭の中国女性文学作品で登場した女性人物を社会的、歴史的な脈に還元することによって、社会に要求された役割規範や、男性によって描かれた女性イメージに疑問を呈しながらそれと交渉する女性たちの多様な姿を描き出す。文学作品の中で登場する人物だけではなく、著者たちは女性作家のライフヒストリーを拾い上げることによって、これらの作品の中で提示される女性人物と作家自身の経験の合致しているところと、齟齬が生じているところを明らかにする。この作業を通じて、女性の生活の実態と女性の本音が掘り出されるようになっただけではなく、当時の中国における女性主義の実態を逆照射することができる。濱田（2021）によると、同時代の男性作家の作品の中で、自由恋愛が称揚されるが、国家の運命と一心同体になった男性の「中国少年」⁽²³⁾と、「中国少年」にはなりえず、ついに恋愛のために殉死してしまった若い女性という対照的な図式が見られる。一方、本書の中で、たとえ恋愛に殉じて、それは伝統の束縛から脱出した勇気をあえて表現するための、積極的な選択という女性側の視点が提示される。また、恋愛関係の中で挑発的で自分の希望通りに男性を導く能動的な女性像は女性の主体性の証として捉えられており、このように、男性中心の歴史記録と対抗する形で、当時の中国の女性が歩む解放の道を女性側の視点から捉え直すことによって、従来の中国女性主義研究で見過ごされてきた側面が描き出される。また、この作業は個々の女性のあり方に焦点を当て、歴史の記述で隠蔽されがちな「個」の存在に光を当てる。本書で見られる女性に対する捉え方は、De Lauretis（1991=1998, p.72）が指摘した「（女性）⁽²⁴⁾連帯をする前に、それぞれお互いが何であり、いやそれぞれ複数のアイデンティティとは何であるかについて考える」べきという考え方と合致するとも言える。さらに、散在した女性の作品を「女が記録する、女向けの歴史」として綴ったかたちで、女はもはや定義されるのみの存在ではなく、自分を自分自身で語り、自ら定義する主体的な存在となった。この姿勢の転換は、女性解放のもっとも重要な戦略の一つ——自己決定——と通底するとも言える。このように、中国の女性学の先駆けとして、本書は女性文学史研究に大きく寄与するだけではなく、女性学に社会学的にアプローチするとき、多くの示唆を与え、社会学的に高い価値を持つ研究とも言える。

5.2. 中国における「女性の成長」を見極める尺度——独自性と可能性

本書は五四運動をきっかけとして歴史の舞台に登場した女性作家を「反逆の息子」の対照的な存在——「反逆の娘」——として捉える。30 年代には性的関係を描写し始め、「女である自分」と「女性という役割」の間の齟齬と距離感に気づいた女性作家とその作品について、著者たちは「ジェンダー的に成人した存在へ転換する」（p.140）と論じる。そして 40 年代になると、日本占領区で創作活動をしていた女性作家は社会に押し付けられた役割規範と距離を置きながら、女性のリアルな心境と複雑な人間関係を描き出した。成人したばかりの無邪気な女性と区別されており、それらの女性作家および彼女たちの作品に登場した女性は老練で「成熟した女性」（p.240）

と定義付けられた。

ここでいう女性の「成長段階」を捉える尺度は非常に興味深い。まず、ひとりの女性が「娘」から「成人した女性」、さらに「成熟した女性」へ変化していく過程の中で、その「成長度合い」を測る基準は、年齢でもなければ、就学状況、結婚しているか否かなど社会役割の取得によるものでもない。「女性としての自己」にたいしてどの程度理解しているのか、さらに言えばジェンダー——社会的性差——をどこまで自覚しているのか、これこそが女性の成長を見極める尺度であるという捉え方が窺われる。また、ここでの成長は女性の「自己」の成立をも同時に意味する。すなわち、女性の「自己」の成立は、ジェンダーに対する自覚と密接に結びついて形成されるという視点がここで提起された⁽²⁵⁾。本書の中で論じられた20年代の「反逆の娘」は「結婚するまで父に従う（未嫁従父）」という伝統の束縛を打破するが、「誰かが守ってくれる、世界と人生の重さを背負わなくてもいい子ども」の段階（p.55）に留まり、大人の女性が立ち向かうさまざまな問題とリスクから逃げ続けていた。1930年代になると、女性作家は自らの身体を観察し、肉体関係を描写し始めたが、「女性自身に対する微細な考えを網羅的に捉えることができず」（p.143）、彼女たちは男性との差異と、男性中心社会にもたらされた「疎外感」（p.143）によってアイデンティティの確立を成し遂げた。そして、1940年代には、日本占領区の女性作家は「弱者」（p.240）の段階から脱出しており、主体として自ら女性という存在を解釈し、定義付けた。こうした女性の自己認識、特にジェンダーに対する自覚による女性の成長と「自己」の成り立ちへの再定義は、戴のその後の著書『渡舟 新しい時期の中国女性文学と女性文化（涉渡之舟 新时期中国女性写作与女性文化）』においていっそう明確になる。戴（2007）は大人になっても、自分の人生と未来に迷いつつある女性像を「彷徨う少女」と定義し、それを1980年代以降に急速な都市化を経験した女性が抱えた「新しい社会的心性、あるいは一種の集団的な幻想の象徴」（戴 2007, p.260）であると論じ、大人の年になっても「自己」を探し続け、ジェンダーに対する自覚がだ十全に発達していない女性を「少女」として捉えた。

本書と戴のその後の研究を踏まえれば、中国の女性、特に「少女」と「少女文化」⁽²⁶⁾を捉える際に、欧米のガリー文化及び日本の少女文化、女子文化とは異なる新たな認識枠組み——ジェンダーと「自己」との結びつき——が窺えるだろう。欧米では、ガリー文化はもともと中高生を中心とする「女の子向け」の文化を指す。北村（2020）によると、第三波フェミニズムのなかで、男性中心的な文化からしばしば蔑視されてきたガリー文化の女の子っぽさは、男性の期待と要求に同化せず自由に生きていくことを象徴するフェミニズム的な美学として捉え直された、と明らかにされた。欧米の「ガリー文化」と比較すると、中国の「少女文化」も女の子っぽさを積極的に捉える。にもかかわらず、そこには男性が提唱する「セクシーな女らしさ」とフェミニストが打ち出した「子供っぽさの美学」という二項対立はそもそも存在していない。むしろ未熟で、可愛らしさに満ちた女の子っぽさが主流であり、対抗的な性格が比較的薄い。そのため、中国では自覚的に「少女文化」を女性主義と結びつけて考える人々は少ないだろう。また、中国では「少女」と自称している人々は年齢に囚われず、「いつまでも少女である私」を宣言した。一方、日本の明治・大正期の少女文化は「まず学校制度の成立によって囲い込まれ、少女雑誌により定型化され、その上で〈現実〉の側に越境していった」（大塚 1991, p.278）。また、川

村邦光はオトメを、「求めようとしても求めないとあきらめた、未来への展望を心の奥底に秘めつつ、麗しい過去へ執心し、過去をたどることにひたすら慰みをみだしている」（川村 1993, p.19）感傷的、ノスタルジック、儂い存在として捉えた。年齢や、既婚/未婚にかかわらず、「オトメ」の感性の共有を基盤とした〈オトメ共同体〉があると川村（1993）は指摘した。21世紀初頭に誕生した日本の「女子」文化は、川村が提示した〈オトメ共同体〉の延長線上に位置づけられる一方、それを超えた要素がある。河原和枝（2012）によれば、そこには女性の自らの再定義があり、男性中心社会の中で分断され切断されてきた女性たちのホモソーシャル・ネットワークの構成がある。しかし、中国の少女文化は学校制度や特定のメディアとの関係性が希薄なだけでなく、感傷的で、儂い色合いも薄い。高嶋航（2018）によると、新中国の男女平等は女性の男性化によって成り立っていた。そのため、改革解放以降の「ジェンダーの自然化⁽²⁷⁾」（Rofel 1999=2006, pp.214-218）の流れの中で、「少女」になることは取り返せない過去を懐かしむより、「脱男性化」を通じてはじめて女性になるという意味合いを帯びている。ここでは、後ろ向きの懐かしさをあまり帯びていない。「再女性化」と「自己決定」を通じて「女性である自己の誕生」という役割を果たしている中国の少女文化は前向きで「成長」の喜びに満ちている。そのほか、あえて共同体を作り、互いに緊密な関係性を持つのに対して、中国の自称「少女」たちはこの名前を共有しながら、緩やかな関係性しかもたない。すなわち、中国の「少女文化」を80年代に改革開放した後の「ジェンダーの自然化」の流れの中で位置づけると、それは女性の老若を問わずに「女らしさ」の獲得を意味する。さらに、「少女っぽい」美学を用いた外見の自己決定や、「少女である自分」というアイデンティティの自己定義からは、「自己」への希求が窺える。中国の「少女文化」は明確に「女の子っぽさ」を女性主義の中で位置づけたわけではないが、「自己」への欲望には女性主義的な側面が読み取れる。

今までの社会学の先行研究では中国の少女文化に注目するものは管見のかぎり見当たらない。しかし、欧米と日本との比較から見ると、中国の「少女」/「少女文化」を捉える際の新たな認識枠組みの必要性が明らかになる。また、欧米と日本のフェミニズムから多大な影響を受けた一方、女性の「脱男性化」という課題を抱えている中国社会では、「子ども・幼女」「少女」と「成熟した女性」を区別する基準は、生物学的なものほかに、ジェンダーというものを認識する観察眼の「発達状態」と、それと密接に結びついて形成された「自己」の「発達状態」にあるかもしれない。精緻な検証は必要であるが、その新たな認識枠組みのプロトタイプは本書と戴の論考にある可能性をここで提起したい。

<注>

- (1) 1949年3月に、北平（北京）で中国婦女第一回全国代表大会は開催され、中華全国民主婦女連合会は成立した。それをはじめとして、婦女連はマルクス主義女性解放論を軸に女性の経済的・政治的平等を推進していった。文化大革命では女性に特化した主義主張自体がブルジョア的だとして糾弾されるようになり、婦女連は1966年から1976年にかけて活動停止

- になった。1978年9月の第四回婦女代表大会において婦女連が「中華全国婦女連合会」という現在の呼称の下で再出発を遂げた。以上の説明は小浜ほか編（2018）を参照。
- (2) 中国女性学の歴史と、李小江の活動については秋山洋子（2018）を参照。
- (3) 中国の女性文学に関しては、李小江は主編した本『華夏女性之謎』（三聯書店 1990）で「女性作家が創作し、女性を題材とした文学」を女性文学の内包とする。
- (4) 豆瓣網では、2018年に再刊された本書について、「読んだ」と述べたのは937人であり、「読んでいる」のは367人であるが、「これから読む」のは6685人である。また、その口コミでは、文学や女性学を専門とする研究者だけではなく、大学生からのコメントも多数見られる（2021年10月24日取得，https://book.douban.com/subject/30147095/?dt_dapp=1）。
- (5) 中国では“feminism”と対応した訳語として、「女性主義」と「女権主義」が見られる。「女性主義」という訳語は西洋からの「フェミニズム」を吸収しながら、中国の独自性を打ち出したというニュアンスがある。また、権力や権利の平等を強調する「女権主義」とは違って、「女性主義」は女性の主体性に力点を置き、権力・権利の平等への追求を含めた包括的な存在である。以上の理由で、本文は「フェミニズム」と「女権主義」ではなく、「女性主義」を使っている。
- (6) 孟悦は戴の同級生であるため、年は近いと推測できるが、生年情報は未公開の状態である。
- (7) 以上の説明はButler（1990=2018）と秋山（1992）を参照。
- (8) 序論とエピローグについて、戴と孟の分担に関する記述は見つからないため、現段階では確認できない。
- (9) 中国の伝統的男性性は文と武で構成される。文武兼備が最高の理想像であるが、文が武に優越した。詳しく、高嶋（2018）を参照。
- (10) 中華人民共和国が成立した以降、男女平等は「ジェンダーの画一化」という形で実現した。「ジェンダーの画一化」はジェンダーの差異を否定し、女性に一方的に男性化を強要することを意味する。それが最も顕著に現れたのが男女とも同じ人民服を着用することである。詳しく、高嶋（2018）を参照。
- (11) 廬隱（1899-1935）、中国福建省出身の女性作家。1916年北京女子師範学校を卒業し、1919年北京女子高等師範学校で学ぶ。北京女子中学校長、北京師範大学附属中学教員等の職に就く。五四運動の中心的な存在。代表作は『海浜故人』。彼女の作品の中で、「覚醒した青年」や「人生の意義を求める苦悶した青年」は多く描写される（2021年12月9日取得，http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~s_aono/zjcidian/zuojia2/h/huang/luyin/luyin.htm）。
- (12) イブセンの『人形の家』で登場した主人公ノラを指している。
- (13) 沅君（1900-1974）、河南省唐河県出身の作家。1919年、北京女子高等師範学校に入学する。1922年、北京大学大学院国学科に進む。『隔絶』『隔絶之后』『慈母』『旅行』などの作品が有名。彼女の作品は当時の女性が伝統的な価値観や行為基準に縛られずに恋愛を追求する様子を大胆に書き出す（2021年12月9日取得，http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~s_aono/zjcidian/zuojia2/f/feng/yuanjun/fengyuanjun.html）。
- (14) 魯迅（[1924] 2005）を参照。
- (15) 氷心（1900-1999）、福建省の作家。北京協和女子大学（のちに燕京大学に合併）に学ぶ。

- 五四運動の影響の下に執筆を始め、詩集『繁星』、『春水』が有名。愛への賛美、特に母性愛を描いたものが多い。児童文学で活躍している（2021年12月9日取得、<https://kotobank.jp/word/%E8%AC%9D%E5%86%B0%E5%BF%83-76189>）。
- (16) 凌叔華（1900-1990）、清末の高級官僚の娘として北京で生まれる。凌叔華は沅君、氷心、廬隱などと名声を等しくする五四運動以後の第一世代の新文学女性作家である。代表作には『酒後』、『花之寺』、『古韻』などがある（2021年12月9日取得、<https://mr.baidu.com/r/xJuvYep1pq?f=cp&u=46670b102fec90bb>）。
- (17) 高嶋航（2018）を参照。
- (18) 丁玲（1904-1986）、湖南省臨豊県の没落地主の家に生まれる。1922年、上海大学に学ぶ。1924年、処女作「夢珂」を『小説月報』に発表、大きな注目を集める。愛を失って墮落する若い女性を描いた『莎菲女士的日記』によって、文壇に地位を確立した（2021年12月9日取得、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%81%E7%8E%B2>）。
- (19) 蕭紅（1911-1942）、黒竜江省呼蘭県の地主の娘として生まれる。祖父の死後、両親の愛情に恵まれぬ孤独な少女期を送る。封建的結婚に反発して家出。放浪ののち作家である蕭軍と結婚し、文学活動を始める。日中戦争の中の東北農民の群像を描いた『生死場』と幼い頃の経験に基づいた『呼蘭河伝』が有名。日中戦争勃発後、各地を流浪するなかで蕭軍と離婚。1942年に香港で病没する（2021年12月9日取得、<https://kotobank.jp/word/%E8%95%AD%E7%B4%85-79154>）。
- (20) 蘇青（1914-1982）、浙江省寧波市出身の作家。国立中央大学（後に南京大学に改称）に学ぶ。出産後の苦悶を解消するために執筆し始める。自身の経験に基づいた処女作『生男与育女』によって一躍有名となる。自伝体長編小説『結婚十年』の中での露骨な性的描写のため、大胆な女性作家とみなされる（2021年12月9日取得、http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~s_aono/zjcidian/zuojia2/s/suqing/suqing.htm）。
- (21) 張愛玲（1920-1995）、上海出身の小説家。代表作に『金鎖記』、『傾城之恋』、『半生縁』などがある。聖マリア女学校を経て1939年に香港大学文学部に進学。1944年、軍閥汪兆銘の傀儡政権幹部の胡蘭成と結婚。1947年に離婚している。張の作品は華麗な文体と女性の恋愛生活に注目することを特徴とする。世界的な中国文学者夏志清は、二十世紀最高の中国文学者は魯迅と張愛玲の二人であると述べる（2021年12月9日取得、<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E5%BC%B5%E6%84%9B%E7%8E%B2>）。
- (22) ジェンダーという概念の中国語訳として、「性別」と「社会性別」が多用され、「女性意識」「性別意識」「社会性別意識」という三つの中国語が、区別されることなくジェンダー意識（gender consciousness）を指している。詳しくは、王政（2004=2016）を参照。
- (23) 1900年に、梁啓超は列強の脅威と国の存続危機を前面に押し出した「少年中国説」を発表した。これによってはじめて、中国では少年が時代の主人公として脚光を浴びるようになった。後に、五四運動の引き金となった陳独秀の「敬んで青年に告ぐ」も、「少年中国説」のように少年（青年）の若さに価値を見出し、中国近代化の出発点となった。このように、「少年中国（若き中国）」と「中国少年（中国の若者）」は固く結びつき、若者と国民国家は一心同体と

なった。詳しく、濱田麻矢（2021）を参照。

(24) 括弧内の内容は筆者より。

(25) 女性の「自己」の成立をジェンダーと結びつけて考えるように筆者を導いてくれたのは田中亜以子（2019）である。

(26) 中国の「少女」と「少女文化」を社会的にアプローチする先行研究は管見の限り見当たらないため、本稿は中国の「少女」と「少女文化」を以下のように定義する。新華辞書によると、中国の少女は13歳-17歳くらいの若い女性を指すため、小学校高学年から高校までの女性を中心とした少女文化がまずある。しかし、本稿で取り上げたい少女はそれと違い、年齢を問わずに、「少女」を自称する人、少女の感性を共有する人々を「少女」の枠組みに含める。本稿はそれらの人々が参加している、ロリータ・ファッションと日本の学校制服ファッションなど、可愛さを称揚するユース・サブカルチャーを少女文化として捉えたい。

(27) 「ジェンダーの自然化」とは、女性は「ジェンダーの画一化」から解放され、再女性化することである。また、「ジェンダーの自然化」の典型例として、1980年代に専業主婦の登場があげられる。詳しくは、高嶋（2018）と落合（1989）を参照。

〈文献〉

秋山洋子，1992，「孟悦・戴錦華著《浮出歴史地表》——フェミニズムの視点に立った近代文学史」『中国女性史研究』4: pp.26-31.

———，2004，『私と中国とフェミニズム』インパクト出版会。

———，2018，「中国におけるフェミニズムと女性/ジェンダー研究の展開」小浜正子・下倉洪・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会。

Barlow, Tani, 2004, *The Question of Women in Chinese Feminism*, Durham and London: Duke University press. (=2012, 沈齊齊訳『中国女性主義思想中的婦女問題』上海人民出版社.)

Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of identity*, London: Routledge. (=2018, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱 新装版』青土社.)

戴錦華，2007，『渉渡之舟 新时期女性写作与女性文化』北京大学出版社。

De Lauretis, Teresa. 1991. *Queer Theory: Lesbian and gay sexualities: an introduction*. Differences 3: pp.2. (=1998, 大脇美智子訳「クィアの起源——レズビアンとゲイの差異を語ること」風間孝・キース・ヴィンセント・河口和也編『実践するセクシュアリティ——同性愛／異性愛の政治学』動くゲイとレズビアンの会, pp.66-78.)

濱田麻矢，2021，『少女中国 書かれた女学生と書く女学生の百年』岩波書店。

北村紗衣，2020，「波を読む 第四波フェミニズムと大衆文化」『現代思想』vol.48-4: pp.48-56.

- 小浜正子・秋山洋子編, 2016, 『現代中国のジェンダー・ポリティクス 格差・性販売・「慰安婦」』 勉誠出版.
- 小浜正子・下倉涉・佐々木愛・江上幸子編, 2018, 『中国ジェンダー史研究入門』 京都大学学術出版会.
- 李小江, 1983, 「人類進歩与婦女解放」『馬克思主義研究』 vol.2: pp.142-166.
——編, 1990, 『華夏女性之謎』 三聯書店.
- 宮坂靖子, 2007, 「中国の育児——ジェンダーと親族ネットワークを中心に」 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』 勁草書房.
- 水上文, 2020, 「＜消費者フェミニズム＞批判序説」『ユリイカ』 vol.52-11: pp.88-95.
- 落合恵美子, 2005, 「現代アジアにおける主婦の誕生——グローバル化と近代家族」『日本学報』 24号: pp.3-28.
- 魯迅, 1924, 「娜拉走后怎樣」『文藝会刊行』 第6期. (再録: 2005, 『魯迅全集』 第1巻, 人民文学出版社, pp.165-173.)
- Rofel, Lisa, 1999, *Other Modernities: Gendered Yearnings in China after Socialism*, California, University of California press. (=2006, 黄新訳, 『另類的現代性 改革開放時代中国性別化的渴望』 江蘇人民出版社.)
- 高嶋航, 2018, 「近代中国の男性性」小浜正子・下倉涉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』 京都大学学術出版会.
- 田中亜以子, 2019, 『男たち／女たちの恋愛 近代日本の「自己」とジェンダー』 勁草書房.
- 田中東子, 2020, 「感じのいいフェミニズム? ポピュラーなものをめぐる、わたしたちの両義性」『現代思想』 vol.48-4: pp.26-33.
- 王政, 2004, 「"女性意識"、"社会性別意識" 辨異 对当代中国女権主義思想的一个分析」『越界跨文化女権実践』 天津人民出版社. (=2016, 秋山洋子訳, 「＜女性意識＞と＜社会性別意識＞ 現代中国フェミニズム思考の分析」小浜正子・秋山洋子編『現代中国のジェンダー・ポリティクス 格差・性販売・「慰安婦」』 勉誠出版, pp.96-122.)